「「もの」の人類学的研究―もの、身体、環境のダイナミクス」2008 年度第 1 回
日時：2008 年 4 月 12 日（土）午後 1 時半より午後 6 時
場所：マルチメディア会議室（304 室）
研究者名（所属）及び報告タイトル：

1) 湖中真哉（AA 研共同研究員、静岡県立大学）
「身体の拡張としてのもの・ものの拡張としての身体」
2) 久保明教（大阪大学）
「マテリアリティの記号論 ―アクターネットワーク論の仮説と方法論およびその射程について―」

==

マテリアリティの記号論
――アクターネットワーク論の仮説と方法論およびその射程について――

久保明教
（大阪大学人間科学研究科博士後期）

[発表要旨]

アクターネットワーク論（ANT：Actor-Network Theory）の研究蓄積を再検討し、「モノ」をめぐる人類学研究における応用の可能性を提示することを目的として発表を行った。

ANT とは、1980 年代初頭から B.Latour や M.Callon らによって推進されてきた学問的潮流である。科学論およびテクノロジー研究から出発して、科学哲学と社会学を横断しながら様々な学問的批判を展開しつつ、近年では経済・法・政治などに対象を広げている。

本発表では、まず ANT の方法論の基盤となる、「対称性アプローチ」および「マテリアリティの記号論」という側面に焦点をあてつつ検討した。その上で、「アクターネットワーク」という概念および、それを構成する主要な概念（「アクター」、「試行」、「媒介項」、「翻訳」、「ブラックボックス化」）を検討しながら、その方法論としての基本的な輪郭を示した。

以上の検討から、ANT の主な特徴として次の３点を導出した。（１）リアリティ生成過程の連続的な把握：特定の命題や判断が真であることを基礎づけたり、それらが虚偽であると批判することを目的にするのではなく、それらの「事実らしさ(status of　a fact)」が変化していくプロセスを追跡することが目指される。（２）ローカル／グローバルという二分法の否定：文脈依存的な社会（文化）的事実と脱文脈的で科学的な真理という区別は否定される。事実の「事実らしさ」は、実践の外部に存在する何らかの審級によって決定されるののではなく、諸アクターから構成されるネットワークが、どれほど密に／長く結び付けられているかによって堅固なものにも柔軟なものにもなる。したがって、ある社会的（ないし文化的）事実の生成過程を追うためには、特定の地域や集団に分析を限定せず、その過程に関わるあらゆるアクターの織り成す諸関係＝ネットワークの働きの解明が目指される。(3) 意味作用をめぐる非言語中心主義的な把握：ANT において、意味作用(signification)を生み出す方法は言語に限定されるものではない。意味は人間やその言語使用によって一方向的に事物に付与されるものではなく、非人間をも含む種々のアクターが織り成す異種

混交的なネットワーク（：「装置」←M.フーコー）の働き、とりわけ「翻訳の連鎖」と呼ばれる働きによって産出される。

以上の特徴を踏まえた上で、「モノ」をめぐる人類学的研究への ANT の応用の可能性を、①プロジェクト性、②モノをめぐる社会関係の生成、③贈与・交換などの論点において検討した。

身体の拡張としてのもの・ものの拡張としての身体

湖中 真哉

（静岡県立大学国際関係学部）

本発表では、本共同研究のテーマであるもの、身体、環境の三者の関係について再考し、物質文化論の新しいモデルを構築することを目的として、理論的な検討をおこなった。まず、本発表では、これまでの物質文化論を物質 / 文化論モデルと物質 = 文化論モデルに分けて議論を整理した。まず、物質 / 文化論モデルは、物質と文化を画然と分ける心身二元論的な前提に立脚している。この理論モデルの問題点は、文化を物質的諸条件に還元する物質還元論（文化唯物論、俗流唯物論等）か、あるいは、これと反対にものの物質性をすべて象徴的意味に還元してしまう文化還元論（象徴論、ニュー・アーケオロジー等）といった還元論に陥ってしまうことである。これに対して、物質 = 文化論モデルは、レイコフ・ジョンソンによる「身体化された心」の理論やバトラーによるセックス / ジェンダー二元論の破棄などと軌を一にして、心身一元論を発想の起点としている。この理論モデルは、精神や文化をあらかじめ特権的な位置に置いて、身体や環境はたんなるその統制の対象としてみる前提を拒絶し、物質性の位相のもとに、もの、身体、環境をよりフラットで対等な関係において捉え直し、それらのダイナミックス全体を包括的に物質 = 文化と呼ぶ。

さて、それならば、どのようにして、もの、身体、環境はフラットな関係を取り結び得るのかを問わねばならない。本発表では、このためのひとつの方向性として、マクルーハンによる「身体の拡張論」に着目し、彼のメディア論を物質文化論として読み直すことを試みた。彼の身体の拡張論は、ホールのプロクセミックス理論に影響を与えており、また、直接の影響関係は不明であるが、類似した発想は、マイケル・ポラニーの暗黙知理論、ギブソンのアフォーダンス理論、ハラウェイのサイボーグ・フェミニズム論、認知言語学等にも看取される。

この身体の拡張論とおそらく対になる発想が、ギブソンのアフォーダンス理論である。ギブソンは、ものが有しているアフォーダンスが身体に伝わることについて議論しており、この場合の発想のベクトルは、マクルーハンの身体の拡張論とちょうど対を成しているとみることができるため、ものの身体への拡張論と呼ぶことができる。つまり、身体の拡張としてものを捉える理論とものの延長として身体を捉える理論を組み合わせることにより、もの、身体、環境を同じ地平から包括的に捉え直す新たな物質 = 文化論が構想できるかもしれない。